

尾張陶磁(1) —近世初期の瀬戸物生産—

井上喜久男

1. 室町時代後期から安土桃山時代の陶器生産

わが国の陶磁器生産の中にあつて、室町時代後期から安土桃山時代にかけての戦国期から桃山期の陶器は桃山期の美濃窯における黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の茶陶に代表される陶磁史で語られる歴史が1930年(昭和5年)の牟田ヶ洞窯での志野陶器の発見以来長く続いてきたが、近年の全国各地の城館跡の発掘調査の増加と瀬戸・美濃の両窯における同時期の窯跡の発掘調査ならびに出土陶器の研究調査が進行して、中世から近世へと通じてその陶器生産の状況が判明してきている。

また、この戦国期から桃山期の陶器の編年的研究は瀬戸・美濃両窯でそれぞれ行われ、両窯の陶器生産の展開過程は技術の交流や陶工移動などにより一体のものであることも判ってきている。

15世紀末期の室町後期は新たな武士層の台頭による戦国の世となり、各地に戦国大名が登場した。この戦国期の到来とともに新しい武士層や町衆を需要層として瀬戸と美濃に新しい窯業形態が発生し、新しい陶器群が出現したのである。

新しい窯業形態への転換はまず瀬戸窯に興り、次いで美濃窯で興った。瀬戸窯と美濃窯は15世紀末期に従来の地下式の窖窯に替わって大窯と呼ぶ、焚口部分を地下とする以外は窯体を地上に構築した半地上式の単室の大形窯による焼成が開始された。

以後、大窯は窖窯から次代の連房式登窯が導入されるまでの間にあつて、過渡的な構造とも考えられる形式のものではあるが、17世紀初めまでの約120年間に渡って専ら使用されたのである。両窯は大窯が登場すると同時に従来の器種を一新させた碗・皿類を中心とする食器生産へと転換を計っている。

(1) 瀬戸・美濃大窯の調査

愛知県における大窯形式の古窯跡は尾張地内が瀬戸市内に21基、知多郡南知多町日間賀島に1基の22基、三河地内の西加茂郡藤岡町内に1基の合計23基が確認されている。^(注1)

その内、発掘調査が行われた大窯は1962年(昭和37年)調査の日間賀島の^(注2)下海窯跡と1968年(昭和43年)の昔田窯跡、1983年(昭和58年)調査の^(注3)小金山窯跡・王子沢窯跡・^(注4)月山窯跡、1985年(昭和60年)調査の^(注5)寺本窯跡・日向窯跡・赤津B窯跡の瀬戸市内7基の合計8基であり、それぞれに調査報告がある。^(注7)

特に、瀬戸市内の大窯21基については発掘調査された7基の調査報告とそれ以外の14基の採集品の報告とを収めての集報が刊行されたので、詳細については報告書に譲ることにする。

瀬戸大窯の立地は赤津川・瀬戸川・水野川・定光寺川・蛇ヶ洞川の各流域の小支流の合流地点や緩流となった河岸にわずかに広がる平坦の集落を望む丘陵頂部に、窯の焚口前が急斜面となるように谷に直交して築かれている。これらの谷間の集落地の多くは江戸時代を通じて窯業生産活動が行われた地区であり、居住地と窯が一体となった定住形の生産体制が形成されてきたことを示している。

一方、美濃窯における大窯は1930年(昭和5年)の牟田ヶ洞窯跡の発見後に、志野をはじめとする桃山期の茶陶の生産地としてその存在が確認されてきた経緯があり、その研究は戦後になっ

てから、とりわけ1970年(昭和45年)からの中央高速自動車道路建設に伴う窯跡の発掘調査以後であるといってもよいほどである。

現在、美濃地内における大窯は約70基の窯跡が確認されている。美濃における大窯生産陶器の編年的研究は美濃古窯研究会を中心として発掘調査資料および窯跡採集資料の再調査が行われてその成果が発表されており、また、古窯跡の出土陶器からの15世紀から16世紀の大窯生産陶器の編年についても発表しているところである。

(2) 大窯生産の状況

戦国期から桃山期の陶器生産の状況は美濃窯が中世から近世へと連続してたどれることもあって、同時期の編年的研究は美濃窯の陶器を中心にして研究が進められているのが現状である。

瀬戸窯では瀬戸大窯の発掘調査が行われ、瀬戸地内の陶器生産の状況が判明してきているが、美濃窯と比較検討していくと両窯が隣接していることにより陶工達の往来が盛んに行われていたことが推測できるところである。

しかし、両窯は同一歩調で展開しているわけではなく、焼成器種等に相違点が認められ、両窯の生産活動に特有の姿を見出すことができる。瀬戸における大窯は現在美濃窯を含めて最古期の窯跡が確認されており、その技術への転換は早かったのにもかかわらず、桃山期の茶陶生産が全く確認されておらず、瀬戸窯の成立に関わる内部の問題を示唆している。

戦国期から桃山期の15世紀末期から17世紀初めの時期は陶磁史にあっては中世から近世への転換期にあたり、窯の構造が中世の窖窯と近世の連房式登窯の中間的な要素を持つ過渡的構造の尾張・瀬戸地方と美濃・東濃地方で大窯と呼ぶ地上式ないし半地上式の単室の形態の窯が使われた時期である。この大窯期は窖窯期と連房式登窯期の間にあって、窯体構造ばかりではなく、焼成器種、製作技法、窯詰め・匣鉢詰め技法などとともに総合した窯業技術の集合形態で構成され、窯業生産技術の革新期である。

(3) 瀬戸窯と美濃窯の関係

瀬戸窯と美濃窯の関係は歴史的には瀬戸物(瀬戸焼)の窯所(産地)としての瀬戸窯と美濃窯である。当時の茶会記に記された瀬戸茶碗等を焼いたと考えられる美濃窯として捉えられるわけである。

瀬戸窯と美濃窯は隣接した窯業地帯であり、技術交流は盛んで、原料陶土も似ていることから製品の仕上がりはほとんど同じものといってもよいものであり、広域的に瀬戸物の窯所とも捉えることができるわけである。

江戸時代的美濃窯はその生産地の東濃地方のほとんどが尾張藩の管理の下に運営・徴税されたことにより、美濃焼として世に販売されることはなく、尾張物・瀬戸物・瀬戸焼としての扱いの下で江戸時代末期(天保年間)まで販売せざるを得ない状況におかれていた。そのため、江戸時代末期までの記録上では美濃焼とする記載はなかったのである。

美濃窯は安土桃山時代に瀬戸山離散による瀬戸陶工の美濃への移動以来、瀬戸窯に包括されたものとなり、美濃の地で焼かれた陶器であっても全て瀬戸焼として扱われ、江戸末期まで歴史的・記録的には美濃焼は瀬戸焼に併合されてしまったのである。

しかし、両窯はそれぞれ独自に歴史的な展開過程を歩んでいることも事実である。

瀬戸・美濃窯とする表記は両窯が一体のものとして瀬戸窯の中に包括を意味するのではなく、

ともに瀬戸物の産地として並記したものである。

したがって、歴史的に瀬戸物（瀬戸焼）は瀬戸窯と美濃窯で焼成されたものであることから、大窯生産以降の尾張の窯業生産の状況として両窯の生産状況を並列的に扱っていくものとする。

2. 近世初期陶器（瀬戸物）の変遷

室町時代（戦国期）から安土桃山時代の瀬戸・美濃陶器（瀬戸物）はこの時代に専ら使用された大窯によって生産されたものである。この大窯と呼ばれる窯跡は瀬戸を含めて尾張地内に23基、美濃地内に約70基が知られている。

これらの大窯生産陶器の編年的展開は茶陶の発生時期を区分の要因の一つとするとともに時代の転機である室町から安土桃山の区分と重なり、大窯Ⅰa・Ⅰb・Ⅱa・Ⅱb期の戦国期の陶器と大窯Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ期の安土桃山の陶器に大別して論じることができる。

大窯Ⅰa～Ⅱb期に編年される戦国期の陶器はその後に編年される大窯Ⅲ～Ⅴ期の安土桃山の陶器と比較対照される^(注10)ところであり、茶陶が存在していないことが大きな特徴で、室町時代に大量に輸入されている中国陶磁の器形をそのまま模倣したと考えられるものが多く存在する。

また、大窯の構造、焼成器種、匣鉢詰め技法のどれもが新しい窯業技術であり、その発現には内的要因よりも外的要因によるものと推察されることから、中国明代の窯業の影響を強く受けているものと推定される。

一方、安土桃山期の陶器は大窯Ⅲ～Ⅴ期に編年されるものである。昭和5年4月11日荒川豊蔵^(注10)は岐阜県可児郡久々利村柿下入合字牟田ヶ洞352番地（現在可児市久々利柿下入合字牟田ヶ洞352番地）の牟田ヶ洞窯跡^(注11)から筍絵の志野陶片を発見した。美濃窯の発見である。これを端緒として従来瀬戸窯で焼かれていたと考えられていた桃山陶器の黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の各陶器が美濃窯で焼かれていることが確認されたのである。

織田信長・豊臣秀吉の天下統一によって社会が安定してくると、中国陶磁の模倣に始まった大窯生産の焼成器種の中に時代の新しい欲求に合わせた器物群が登場してきた。

茶の湯の流行により茶陶の需要が興り、戦国期以来の中国陶磁に影響された器種の焼成から千利休・古田織部等の茶頭の嗜好性に応じた茶陶製品が加わってきたのである。これらの茶陶製品が黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部と名付けられた陶器群である。

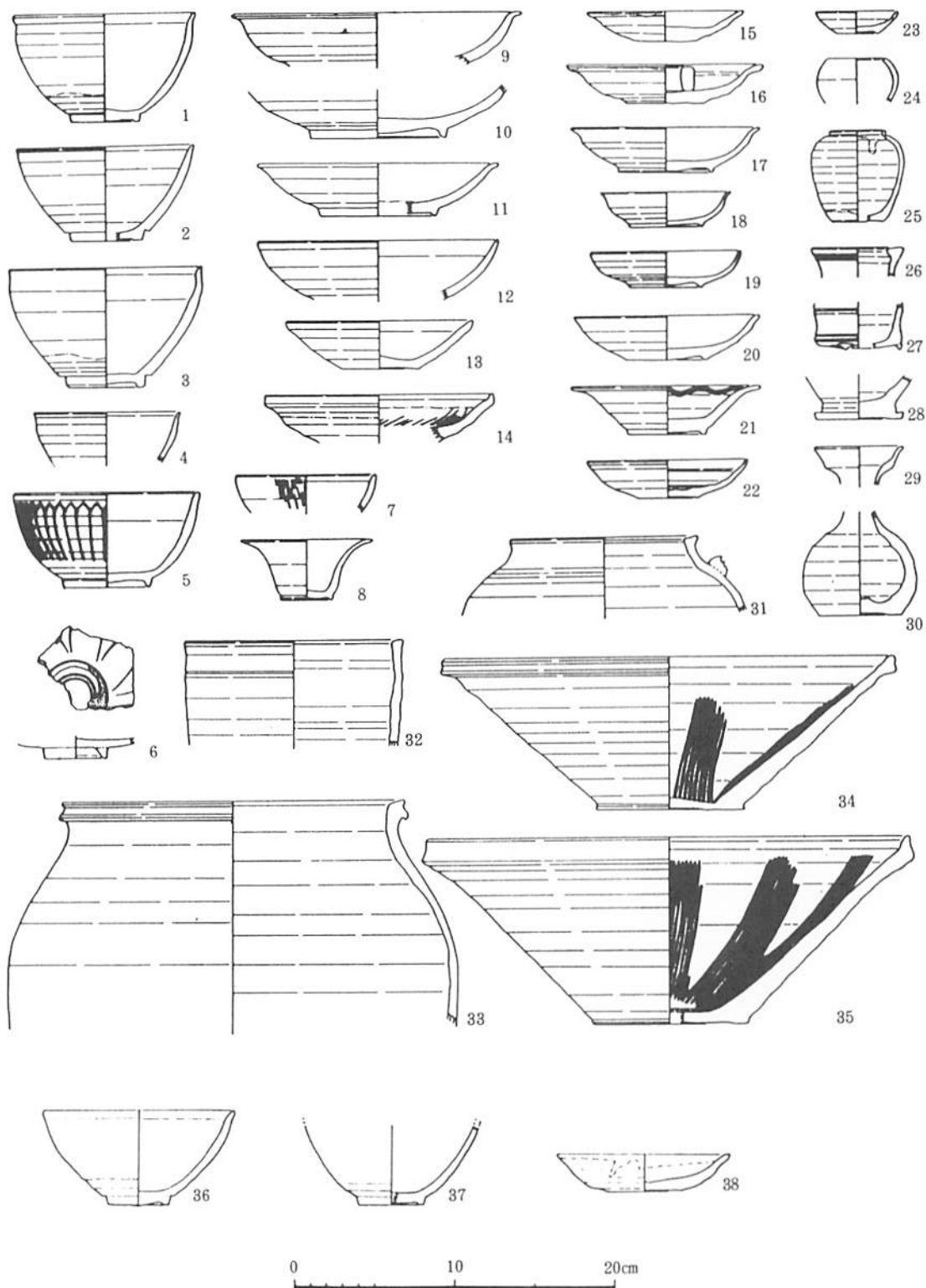
(1) 大窯Ⅰa期の陶器（第1図）

推定実年代は1490年頃～1510年頃までである。大窯Ⅰa期の陶器は大窯による焼成の最初期であり、大窯Ⅰ期を古(a)、新(b)に分けた古い時期で、大窯期になって新たに登場する新しい器種の最古型式の時期である。

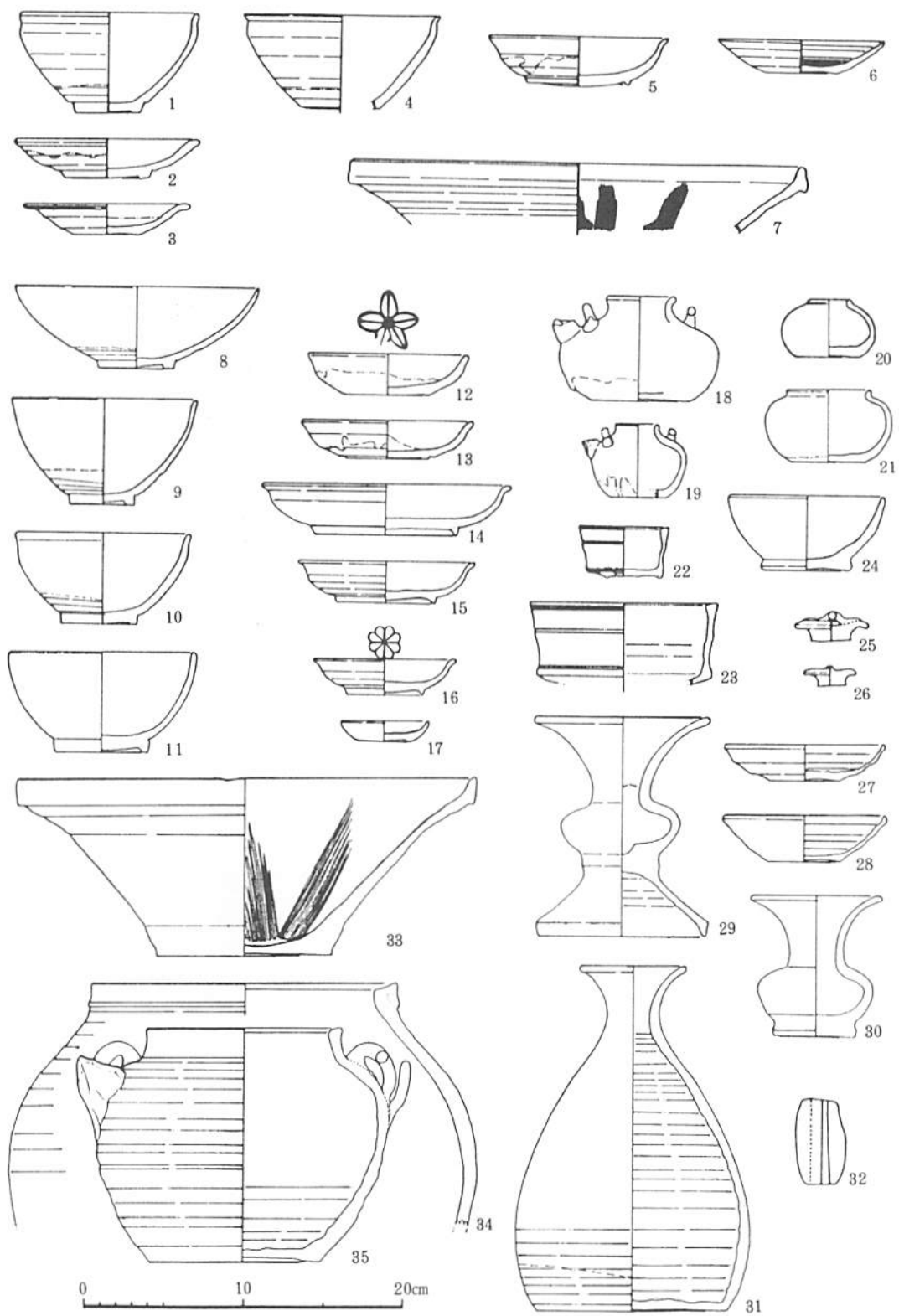
焼成器種は一部の器種に前代の宮窯から継続して焼成されているものが含まれているが、大部分が大窯の導入とともに新たに受け入れた新型および新器種である。それらは天目茶碗・丸皿・ひだ皿・丸碗・茶入・徳利・香炉・花瓶・四耳壺・搦鉢・甕などである。焼成器種は宮窯Ⅳb期の器種である灰釉小皿（糸切り底）・灰釉おろし皿・托付碗などを引き継ぎ、灰釉蓮弁文碗・灰釉蓮弁文平碗・灰釉櫛目文小皿・灰釉稜皿（削り出し高台）といった本期特有の器種が存在する。

標式となる窯跡は瀬戸窯では小金山窯跡^(注12)・円六洞窯跡^(注13)・朝日窯跡^(注14)、美濃窯では白山窯跡^(注15)である。

(2) 大窯Ⅰb期の陶器（第2図）



第1図 大窯I a期の陶器 1~35 小金山窯跡, 36~38 白山窯跡



第2図 大窯Ib期の陶器 1~3朝日下窯跡, 4~7夕日窯跡, 8~35小名田窯下1号窯跡

推定実年代は1510年頃～1530年頃までである。大窯Ⅰb期はⅠa期の特徴が退化を示し、存在したとしてもその型式は変化した残存形態のものとなる。標式となる窯跡は瀬戸窯では朝日下窯跡・夕日窯跡、美濃窯では小名田窯下1号窯跡である。

釉薬は灰釉と鉄釉の二種類があり、焼成状態の不備などによる変化は別にして、鉄釉には黒地に灰や長石を散らした斑文が施されたものが存在する。

(3) 大窯Ⅱa期の陶器(第3図1～8)

推定実年代は1530年頃～1550年頃までである。大窯Ⅱa期は大窯Ⅱ期をⅠ期同様に古(a)・新(b)に二分した古い時期である。

大窯Ⅱa期の陶器は大窯Ⅰ期から引き継ぐものがほとんどであるが、皿類の中に消長が認められ、緑掛け釉の丸皿が消え、菊文丸皿・稜皿が出現する。灰釉丸皿は口縁の引出しが長く、わずかに反りを残存させている形となり、内側面に丸彫りが施される菊花文小皿が存在するのが特徴である。標式となる窯跡は瀬戸窯では王子沢窯跡、美濃窯は柿下1号窯跡である。

(4) 大窯Ⅱb期の陶器(第3図9～37, 第4図)

推定実年代は1550年頃～1570年頃までである。大窯Ⅱb期は灰釉丸皿は口縁のわずかに反りのある引出しがなくなってやや浅くなる。内側面に丸彫りが施される菊花文丸皿は幅広い丸彫りとなり、この期で消滅する。標式となる窯跡は瀬戸窯では落合窯跡・日向窯跡、美濃窯では妙土窯跡・丸石東窯跡である。

釉薬は灰釉・鉄釉に加わって銅緑釉と黄釉が出現して四種類となる。銅緑釉は単独で用いられて、丸皿・稜皿・徳利に使用されている。黄釉は鉄化粧の上に灰釉が施されたもので、下層の鉄の作用により白濁じりの黄褐釉となったものであり、黄天目として認められる。

(5) 大窯Ⅲ期の陶器(第5・6図)

推定実年代は1570年頃～1580年頃までである。大窯Ⅲ期の陶器は量産できるように窯道具の輪トチを用いて重焼きが行われ、内面底部に釉を施さない無釉箇所を設けるなど重ね焼きに都合のよい成形と施釉法が発達した。

焼成器種は天目茶碗・丸皿・ひだ皿・茶入・徳利・香炉・搦鉢・甕などであり、稜皿が深めのものとなり、折縁皿が量産されるようになる。美濃窯の尼ヶ根1号窯跡では引出し黒茶碗が出土し、瀬戸黒茶碗の焼成が開始されたことが判明した。

釉薬は灰釉・鉄釉・銅緑釉・黄釉に加えて引出し黒が出現して五種類となった。引出し黒釉は溶けた鉄釉が急冷により黒変することを応用した釉薬であり、半筒形茶碗と併せて出現してきたものである。

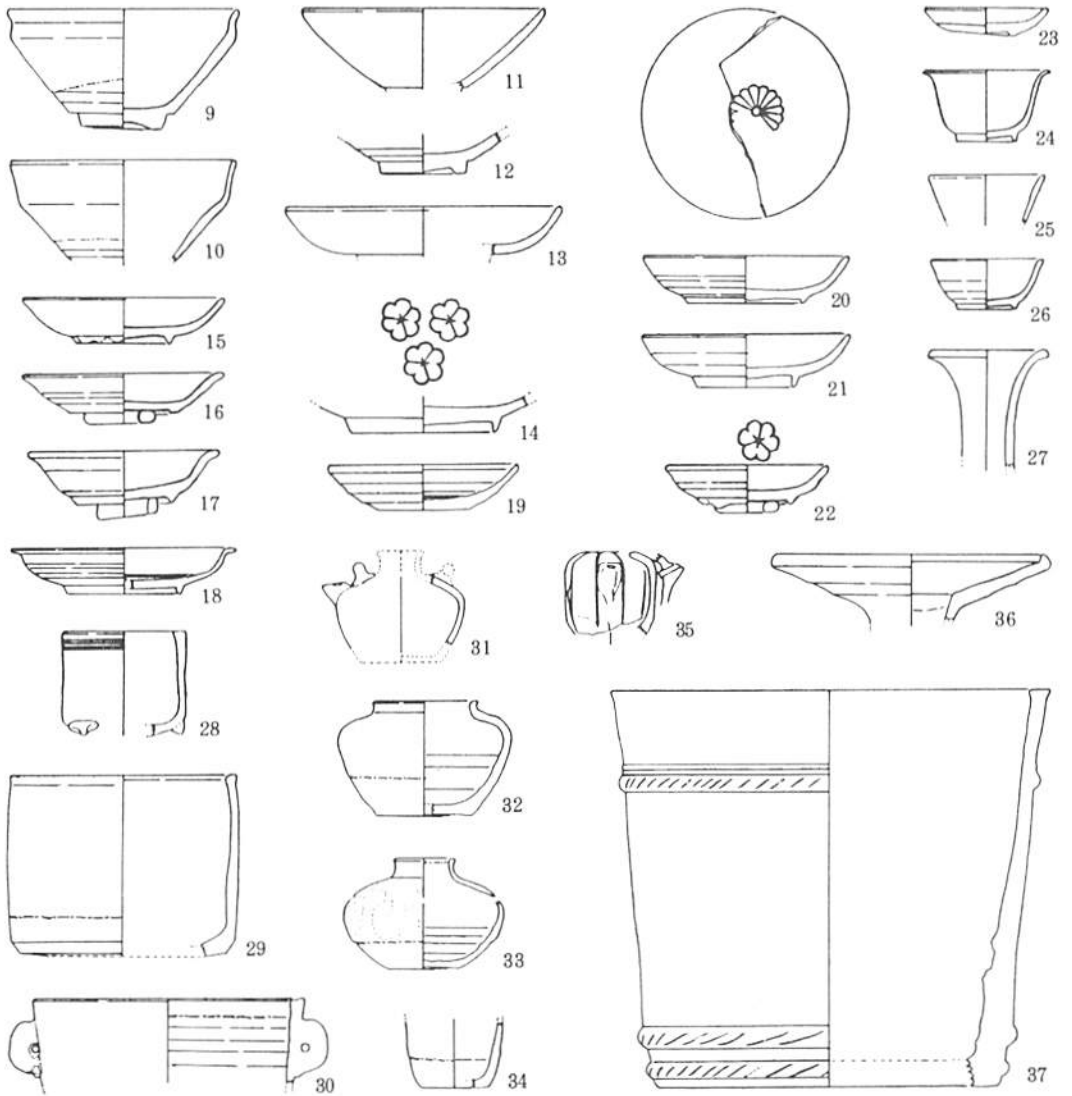
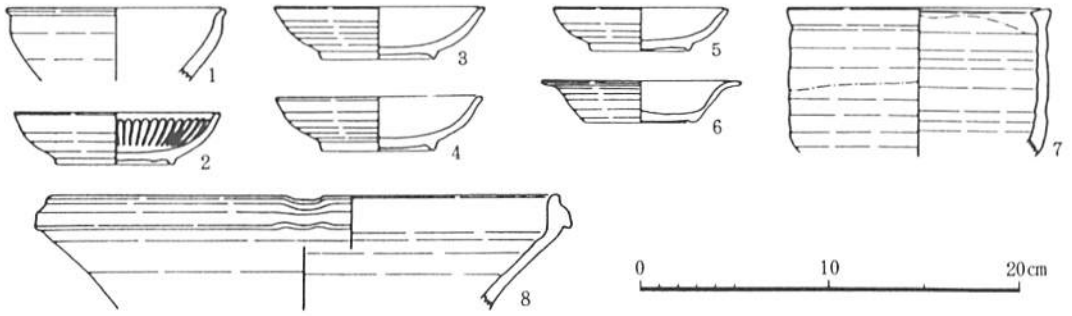
標式となる窯跡は瀬戸窯では月山窯跡、美濃窯では尼ヶ根1号窯跡・赤サバ窯跡・定林寺東洞1号窯跡である。

(6) 大窯Ⅳ期の陶器(第7図)

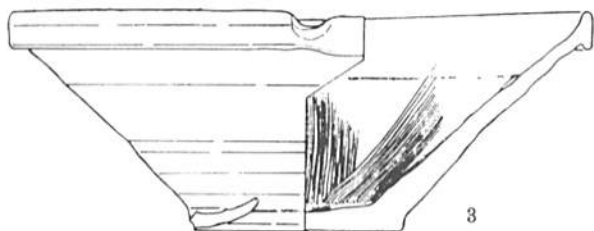
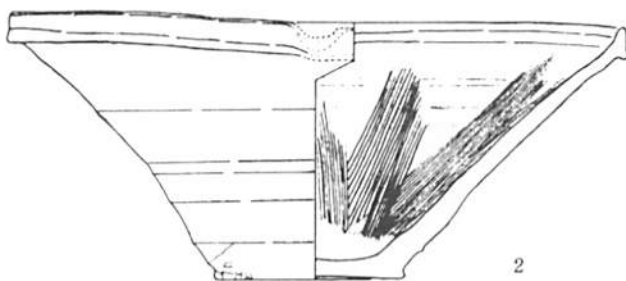
推定実年代は1580年頃～1585年頃までである。大窯Ⅳ期の陶器はⅢ期から継続して焼成される器種に向付類と呼ばれる皿・鉢類が出現し、灰釉・鉄釉の製品と黄瀬戸・灰志野製品がある。

釉薬は灰釉・鉄釉・銅緑釉・黄釉・引出し黒釉に加えて灰志野釉が出現して六種類となる。

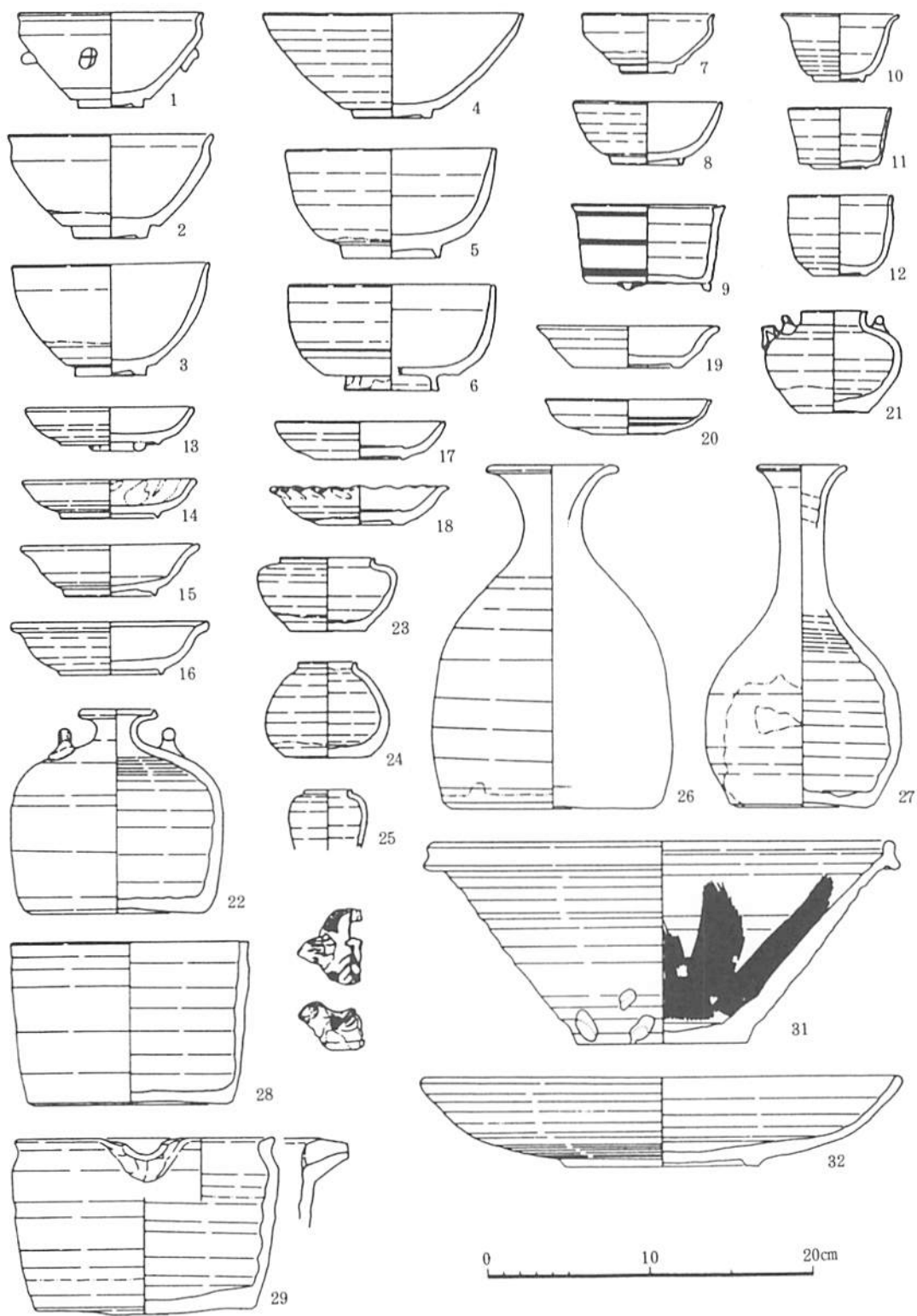
また、銅緑釉は単独使用のほか鉄釉の褐色と灰釉の黄色との三色の組み合わせによる使用法が考案され、黄瀬戸陶器の出現となる。灰長石釉(灰志野)は鉄絵具の下絵を伴って白釉陶器と



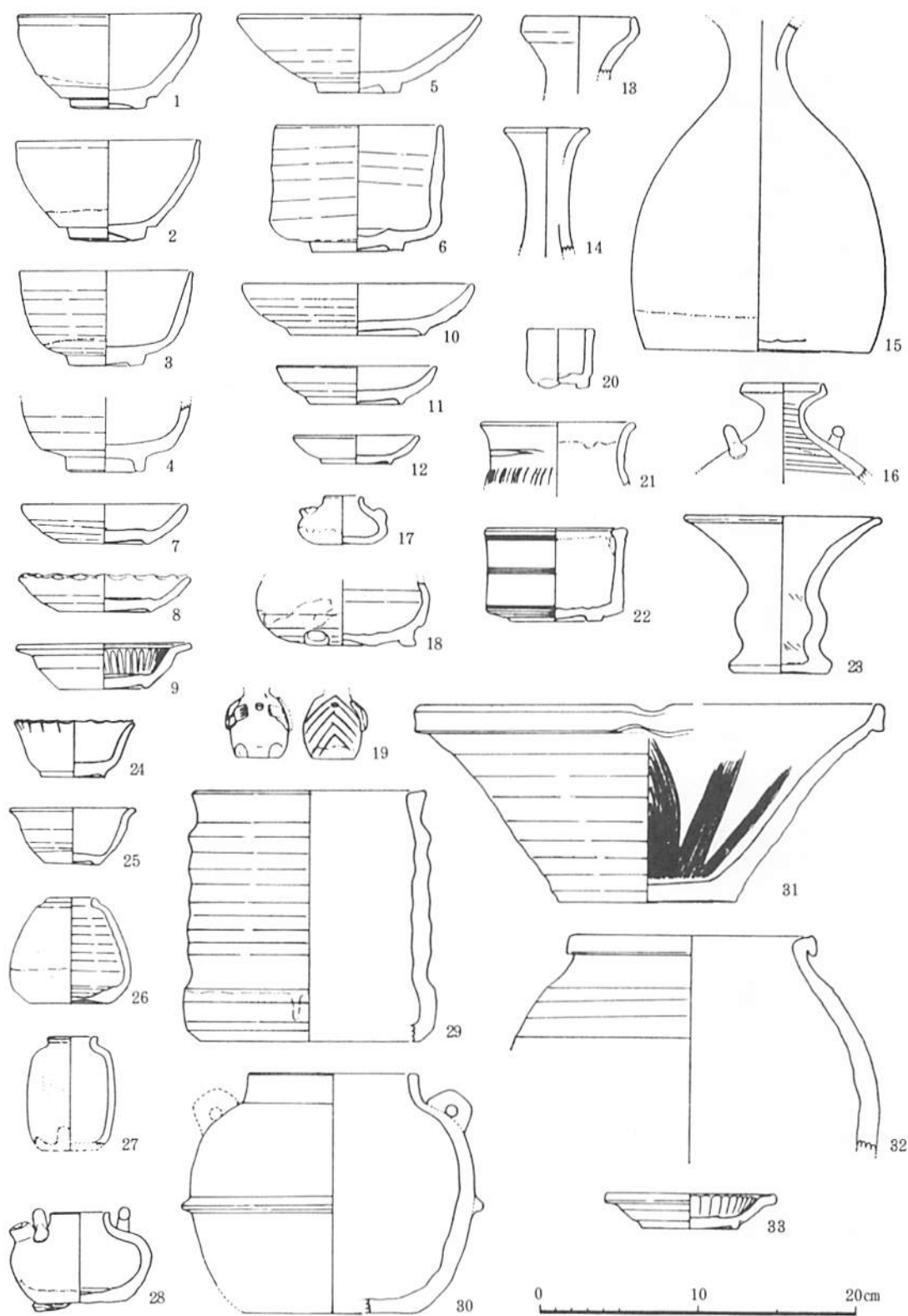
第3図 大窯Ⅱaの陶器 1～8 王子沢窯跡
大窯Ⅱbの陶器 9～37 妙土窯跡



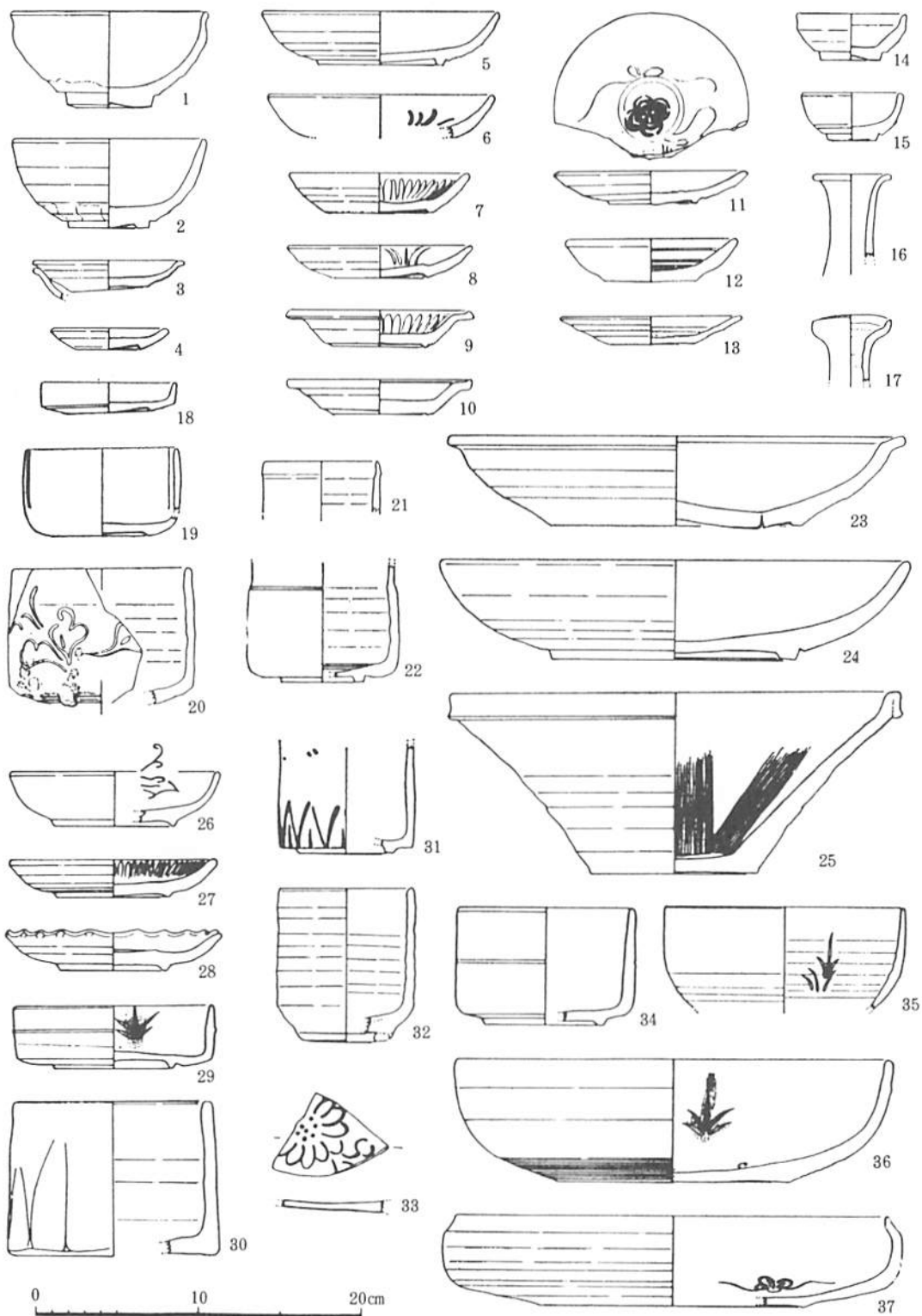
第4図 大窯Ⅱb期の陶器 1~3 妙土窯跡, 4 落合窯跡, 5~9 日向窯跡



第5図 大窯Ⅲ期の陶器 1~32 月山窯跡



第6図 大窯Ⅲ期の陶器 1~31尼ヶ根1号窯, 32・33定林寺東洞1号窯跡



第7図 大窯Ⅳ期の陶器 1~25 山之神窯跡, 26~37 浅間西窯跡

して出現し、筆描き下絵技法初源形態のものとなった。

標式となる窯跡は美濃窯の山之神窯跡・浅間西窯跡であるが、瀬戸窯ではこのⅣ期以降の窯跡は確認されていない。
(注30) (注31)

(7) 大窯Ⅴ期の陶器 (第8図)

推定実年代は1585年頃～1605年頃^(注32)までである。大窯Ⅴ期の陶器は灰長石釉から分化して長石単味による志野が出現し、黄瀬戸・瀬戸黒の陶器とともに主流の陶器群となった。志野の出現は白色陶器の完成により鉄絵具による筆描き文様を発達させるとともに、従来の印刻・線刻・貼付の技法に限られていた装飾技法から解放されたのである。そして、志野は筆描き文と貼付の文様、黄瀬戸や灰釉の陶器は印刻と線刻の文様というように焼成器種と釉薬と文様がセットになった形態の陶器となり、その枠組みからはみ出ることほとんどなかった。

即ち、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の陶器には特有の形態が存在し、その形態により釉薬が決定され、また、逆に釉薬によりその素地となる形態が決定されていた。この現象は美濃窯の陶器が持つ特徴であり、それらの陶器を製作する上での制約でもあった。^(注33)

この釉薬と器物の形態とのセット関係は釉薬に耐える素地の厚さなど造形上の制約があったとしても、約束事のように守られている。このことはこれらの茶陶が茶の湯という作法や茶頭の思想の下に使われていたという特殊な場が関係しているものと考えられる。

また、志野は白地鉄絵陶器のみを求めたのではなく、鉄絵具の用法により、鼠志野・赤志野・紅志野と称す鼠色や赤褐色の陶器、白土と赤土の練込みによる交胎地肌など、美濃の山中に産する長石と鉄が巧みに利用されて白色陶器のみならず中間色の色彩で、全体が単一の色彩にならない斑状の色の変化を求めた色彩豊かな陶器群を形成したのである。

志野は美濃窯の各地区で焼成され、窯跡は大萱・大平・高根山・久尻・大富・定林寺・妻木・大川・郷ノ木に分布する。中でも優れた茶陶を焼いた代表的な窯跡は大萱の牟田ヶ洞窯跡である。

3. 近世初期陶器の製作技法

(1) 大窯の窯体構造

大窯は前方が急斜面となる丘陵上部の、窯体の煙道が尾根の稜線近くに達する位置に築窯された半地上式の単室の大形窯である。半地上式とは燃焼室が焚口から水平に掘り込まれ、燃焼室の奥の焼成室との境で地下約1mになることによる。

窯は最大幅となる焼成室の向かって右側壁に窯内の入口を設け、その脇には丘陵斜面を平坦に造成した作業場が造られ、物原が作業場の前方斜面に広がっている。

また、窯の焚口の前方斜面は灰原となり、黒灰色の灰層となっている。窯の構造は大きく燃焼室・焼成室・煙道部の三つに分かれる。

例えば、岐阜県土岐郡笠原町・妙土窯跡をみると、燃焼室は焚口が幅狭く90cmで、石敷である。その奥で急に幅広くなり、焚口から90cmの焼成室との境で340cmとなる。また、その位置で約30cmの昇焰壁の段となり床面が高くなる。その境の中央に分焰柱とその両側の昇焰壁の直前に各7個の小分焰柱を立て、その上に粘土を充填した匣鉢を据え付け、縦狭間状の構造を造っている。焼成室は床面が20～31.5°の傾斜面となって上昇し、煙道部に向かって次第に絞られるように幅が狭くなり、先端部で66cmとなる。床面も緩やかになって23.5°となり、煙道先端となる。中軸



第8図 大窯Vの陶器

1~4・7・8・10・18・19・21・23~26・30・32 由右衛門窯跡
 11~14・16・17・20・22・27・29・31 中窯跡,
 5・6・9・15・28 牟田ヶ洞窯跡

線上には天井の支柱が4本設けられている。

大窯は次の形態の連房式登窯が登場するまでのあいだに使用された構造的には過渡的なもので、細部においては全長が短くなり、煙道端に煙突を構築したと推定されるなどの変化が認められるが、約120年間用いられた。17世紀初頭には連房式登窯の導入が推定され、その座を譲った。

(2) 大窯構造の変遷

大窯の構造は半地上式の単室の大形窯であり、前代の窰窯と次代の連房式登窯の中間的な過渡的構造のものである。大窯期の約120年間の間には内部の構造や大きさ、窯体傾斜度などに変化が認められ、大窯生産陶器がⅠa～Ⅴ期に七期編年区分してその展開が辿れるように、窯跡の発掘調査例の増加によって窯体の変化過程を概観できるようになってきている。これらの窯跡の計測値は「表1. 窯体法量表」のとおりである。

表1. 窯体法量表

	窯跡名	全長	燃 焼 室		焼成室 最大幅	煙 道 先端幅	床面傾斜 ^(度)	昇焰壁高さ	小分焰柱	
			焚口幅	最大幅					左	右
瀬戸	小金山 ^(注35)	744	96	196	284	78	22～28度	38	8本	8本
	昔田 ^(注36)	(810)						約30	7	9
	王子沢 ^(注37)	—	—	—	—	—	28前後	25	—	5+α
	寺本 ^(注38)	—	—	—	—	—	25前後	—	—	—
	月山 ^(注39)	—	—	—	—	—	35°前後	—	—	—
美濃	妙土 ^(注40)	783	90	—	340	66	26.5～23.5	約30	7	7
	尼ヶ根1 ^(注41)	約650	—	—	約420	—	28～30	—	—	—
	尼ヶ根2 ^(注42)	702	60	—	348	—	中央 29	30	(8)	8
濃	定林寺東洞Ⅰ ^(注43)	—	—	—	425	—	—	30	9	9
	定林寺西洞Ⅰ ^(注44)	—	—	—	—	—	40	50	8	8
	窯沢 ^(注45)	620	50～60	330	320	—	30	30～40	(4)	4

そこで、これまで瀬戸・美濃の両地域で発掘調査が行われている各時期の窯跡から、全体の遺存度の高い窯跡の窯体構造図を同縮尺で集成（第9図）を試みることにした。

窯体構造図は平面図と中軸線の断面図の二図を合わせたものである。その二図の上に実寸1mの方眼を被せて対比し易い方法をとることにした。方眼は平面図では窯体の分焰柱と支柱を通るように中心線を定め、燃焼室と焼成室の境が通例昇焰壁となり、約30cmの段となっており、この境の点に、中心線に直交する方眼線がくるよ

表2. 窯体傾斜度表

窯跡名	編年期	x	y	$\frac{y}{x}$	$\theta = \tan^{-1} \frac{y}{x}$
1 小金山	Ⅰa	620	315	0.508	26.933
2 昔田	Ⅰb～Ⅱa	655	300	0.458	24.608
3 妙土	Ⅱb	640	320	0.5	26.565
4 尼ヶ根2	Ⅲ	570	295	0.517	27.363
5 窯沢	Ⅴ	350	200	0.571	29.744

うに中心を定めた。また、方眼の断面図では平面図における中心点が燃焼室と焼成室の境の昇焰壁の下端にくるように定めた。こうすることにより平面図では窯体の中軸線（分焰柱と支柱を通る線）に対して左右が対称形かどうかを見ることができるとはもちろんの

x: 焼成室・煙道部の長さ (cm)

y: 燃焼室床面から煙道床面先端までの比高差 (cm)

θ: 燃焼室床面から(中心点)から煙道床面先端までの傾斜度

こと、燃焼室の床面から煙道先端までの比高差が判り易くなる。

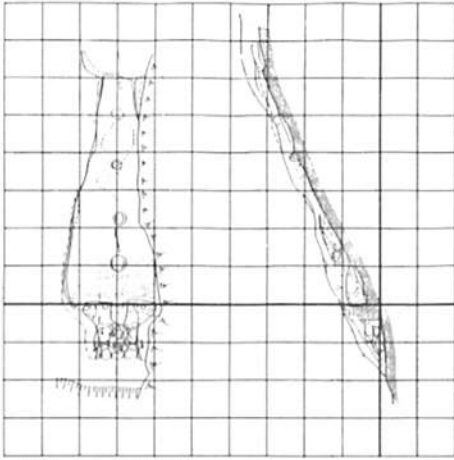


図1. 小金山窯跡

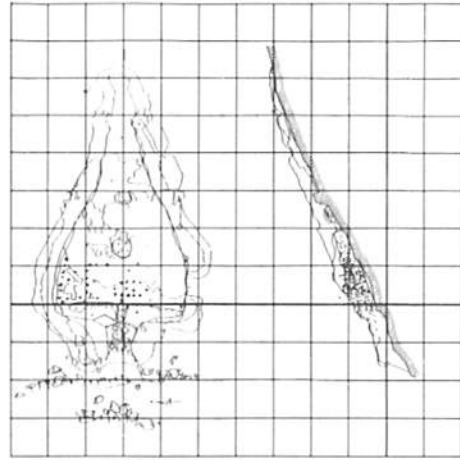


図5. 尼ヶ根2号窯跡

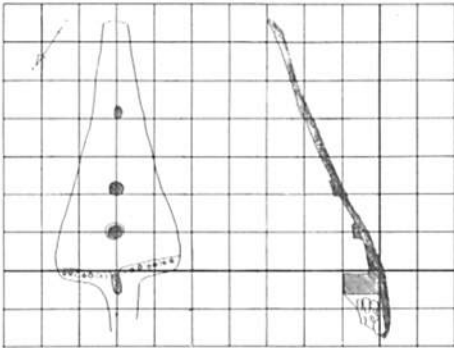


図2. 昔田窯跡

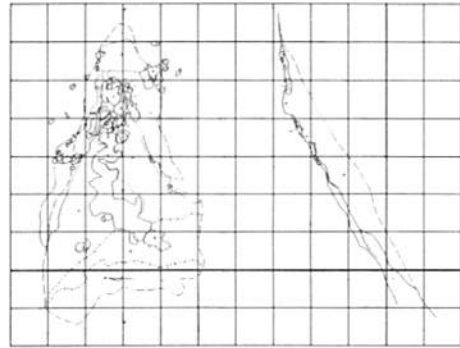


図6. 尼ヶ根1号窯跡

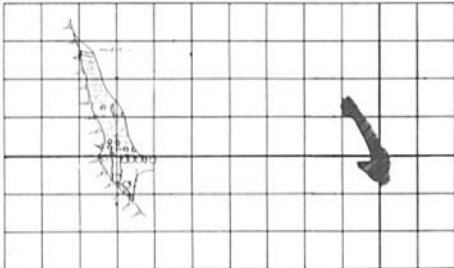


図3. 王子沢窯跡



図7. 定林寺東洞1号窯跡

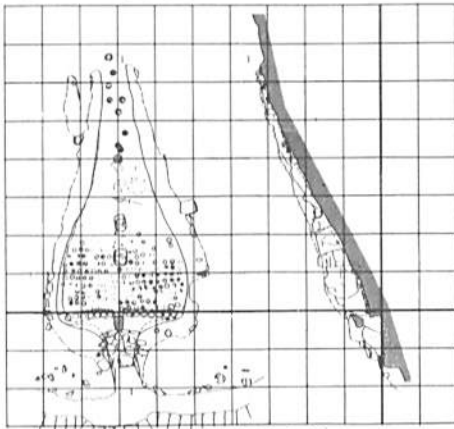


図4. 妙土窯跡

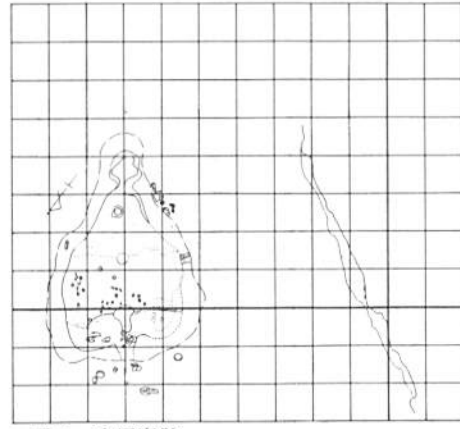


図8. 窯沢窯跡

第9図 窯体構造図集成

さらに、窯体構造図に設けた中心点からの長さとは高差からの窯の燃焼室から煙道先端までの角度を計測したのが「表2. 窯体傾斜度表」である。

(3) 大窯の平面形と傾斜度について

大窯の平面形は基本的には窰窯と同じであり、傾斜面となる焼成室の床面を持ち、最下部に燃焼室がある。窰窯は地下に掘られたものであり、大窯は燃焼室の一部分を地下へ掘り込んでいるが、地上へ構築したものであることが大きく異なる。そのため、窯体の天井を支える柱が焼成室と煙道部にかけて3～4本設けられている。焼成品は匣鉢へ詰めて床面から天井まで積み重ねているため支柱は分焰機能はほとんど持たされていなかったものと推定される。

最古の大窯・小金山窯跡は焼成室の最大幅は284cmで、発掘調査された窯跡の中で一番幅狭いものである。そのことは昇焰壁前の小分焰柱が左右とも各3本と少ないことにもつながっている。構築方法としては小金山窯跡と同規模ないしそれ以上の規模の窰窯は多く存在していることから、大窯を地上に築く理由としては単に大きさのみに求めるわけにはいかない。天井を支える柱を必要とする構造を考えると、地下にトンネル状に掘抜きにする以外は構築材料の都合により支柱を設けないと築くことができなかつたので、熱効率の関係で地上に築くために支柱を必要としたか、あるいは匣鉢積みによる窯詰めのため、窯内の空間が大きい方が良く、高くアーチの大きい天井とするために支柱を必要としたかである。

大窯以前の岐阜県多治見市・東町1号窯跡・2号窯跡は山茶碗窯で発掘調査が行われた最も新しい時期の窯跡群である。同窯跡群は地下式で燃焼室の床面と側壁の天井部までに岩石の使用が認められ、また、燃焼室と焼成室との境に1号窯跡で43cm、2号窯跡で28cmの昇焰壁が存在しているものである。

この窯跡群のように山茶碗の終末期には燃焼室の焚口の幅が狭くなり、床面および側壁の天井部までに岩石を使用することや、昇焰壁を設ける事など大窯の窯体構造の先駆的な形態が発生してきている。

しかし、このことが大窯の出現へ直接的に結びつかないようである。大窯構造は昇焰壁前の小分焰柱を並列させる狭間状施設、窯内空間を大きくするために天井を高くして支柱を設け、作業し易いように側壁に入口を設け、そして熱効率を上昇させるために地上に構築することが特徴である。

山茶碗窯跡に認められる大窯に似た施設が窯体の一部に存在していたとしても、大窯全体の機能として完成された形態との間には断絶があるといわねばならない。

工人集団の面からみても、山茶碗生産の無釉陶器焼成集団と瀬戸系の施釉陶器焼成集団は別々に活動しており、山茶碗焼成集団が大窯へ転換したとは考えられず、施釉陶器集団にその可能性が求められるわけであるが、現状ではそのことを論ずるまでの発掘調査による資料が整っていない。

大窯の窯体構造は焼成器種や焼成方法に至る周辺の窯業技術が窰窯が持つ技法と異なっていることから、総合的な新しい窯業形態であり、内的要因よりも外来技術により発生したものと推定しているところである。

大窯は窯体幅をより広くすることで焼成に適した温度空間を確保しており、定林寺東洞1号窯跡の425cmが最大幅で、小分焰柱は左右各9本である。焼成室は下方の燃焼室からの火焰により

温度を上昇させるわけであり煙道方へ行くほど温度上昇が低くなることになり、より幅広くしようとしたわけであるが、限界があるようである。

焼成室と煙道とは連続した窯内となり、その間を区切る施設は全く存在していない。平面形の両側壁において、幅を減じ始める屈折点らしき変化が認められ、その辺から上方が煙道部であろうと推定できる。

また、その辺から床面の硬化度が減じ、砂床状の柔らかい床となり、匣鉢を積み上げた匣鉢と床面との間に据えた焼台痕が全く認められなくなることも煙道部とすることを裏付けている。

集成図1～4までの小金山窯跡・昔田窯跡・王子沢窯跡・妙土窯跡は大窯Ⅰa～Ⅱb期に編年される窯跡であり、時期が下がる順に焼成室の最大幅が大きくなり、焼成室の両側壁が胴張りとなって窯内空間を広げ、量産化を計っていることが認められる。

集成図5～8は大窯Ⅲ～Ⅴに編年される窯跡であり、全長が少し短くなり、窯体傾斜度が増している。窯の全長が短くなった分は多くは煙道が短くなったことによるものである。煙道部が短くなったことで、それまで先端部に閉塞施設らしきものは全く認められなかったが、尼ヶ根1号窯跡や窯沢窯跡では煙道先端の両側壁から絞って幅を狭くしようとした形跡が認められる。それは窯沢窯跡が特に顕著であり、窯体傾斜度も高くなっている。後者のように全長を短く、煙道先端に閉塞施設を持ち、窯体傾斜度が高くなる現象は焼成に適した温度空間が減じておらず、一回の焼成量の問題ではないようである。焼成品種からみれば、大窯Ⅲ期以降は灰釉は黄色味のものが多くなり、瀬戸黒茶碗、黄瀬戸鉢・皿類、志野製品の出現など、大窯Ⅰ～Ⅱ期が灰釉・鉄釉陶器がそのほとんどを占め、わずかに銅緑釉陶器が認められる時期に比べれば、釉薬が多彩になり、色彩豊かな陶器の焼成が行われている。そのためには温度上昇に適した酸化焰・還元焰焼成の操作がし易い構造の窯が求められて改良されたことが考えられる。さらに、これ以上の熱効率を高め、省エネルギーで量産化を計るためには焼成室を連続して焼成空間を増加させた連房式登窯の導入を持つしかなかった。

(4) 大窯の立地

大窯の立地は瀬戸・美濃の両地域ともに谷川によって開かれた谷を望む丘陵斜面に位置している。窯体の中軸線は丘陵斜面に直交し、窯の焚口前は人が立つことができるわずかな前庭部があるのみで、すぐに斜面地となる。窯体の中軸線の方位は一定した方向はないようで、谷風の方角を利用するために個別に対応しているようである。

また、窯は並行して築かれることは少なく、谷川によって区切られた丘陵に1基ずつの単位で存在し、土地利用に一定の専有権が存在していたことが窺われる。それは窯の集約化により大窯の稼働人数が窖窯期と比べて倍加していることが予想され、一窯に対する工人集団＝窯屋の土地専有利用が進行した。そのことは窯屋の独立性が確立し、同時期に採業している窯には同様な焼成器種とは限らず、独特な焼成器種を持つことが可能であり、独特の器種を焼成している。

流通についても瀬戸と美濃と二つの地域に分けたとしてもそれぞれ焼成品が一括的に集積されて、集中的に取り扱われているとは考えられず、複数の流通経路で販売されたことが考えられる。全国各地の消費遺跡から出土する陶器類は遺跡の性格毎にその内容が変化し、消費者の多様な価値感と嗜好性が反映されたものとなっている。そうした消費者の違いは窯屋の自立性を支える役割を果たしているものと考えられる。

大窯は谷川により開けたわずかな流域に居住する工人集団の里の窯であり、それらの集落と窯が同一区域内に立地する単位のひとつは後の江戸時代へ通じる製陶地として成長している。

(5) 大窯期の焼成技法

大窯による近世初期陶器の焼成は施釉陶器と僅か一部の器種の無釉陶器の焼成であり、大甕や搦鉢などの大形品を除いて匣鉢に入れて行われている。近世初期陶器は前代の宥窯による中世陶器の焼成品と違い、新しい器種の全面施釉陶器を主体としたもので、その焼成には独特の匣鉢技法と量産するための窯内いっばいの窯詰めが行われた。

a. 匣鉢詰め技法 (第10図)

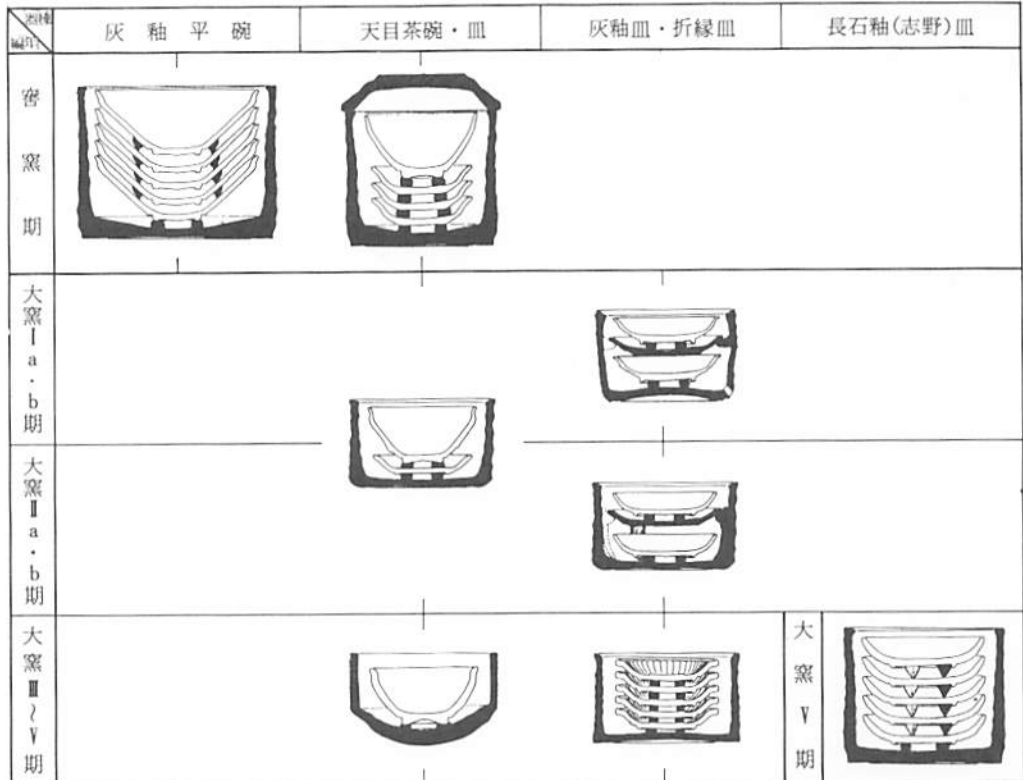
器物の全面に施釉された上質の施釉陶器を狙い、重ね焼きによる量産化を計るため、大窯構造の窯の導入と同時に前代に無かった独特の匣鉢詰め技法が導入された。

匣鉢詰めは焼成する器種により工夫され、匣鉢のほかに匣鉢ピン(横ピン・長脚ピン)・はさみ皿・輪トチン・エブタなどの窯道具類がある。

皿類は大窯期の七期編年のⅠa～Ⅴ期のうち大窯Ⅰa～Ⅱb期には匣鉢ピンとはさみ皿の使用により全面施釉皿が焼成され、大窯Ⅲ～Ⅴ期にはトチンによる重ね焼きの量産化が計られた。

横ピンと長脚ピンは匣鉢の内側面の中位の三方にはさみ皿を棚掛けるための突起であり、突起のみを匣鉢に付着させたのが横ピンで、横ピンが付着箇所から外れて落ちないように匣鉢の底まで脚を伸ばしたものが長脚ピンである。

はさみ皿は全面施釉皿の上面に重ね焼きのトチン跡を生じさせないために考案された用具で、横ピンや長脚ピンに引っ掛けて棚を設けて二枚の全面施釉皿を焼成するための皿状の円板である。



第10図 匣鉢詰め技法模式図

通常、実用に供しないものではあるが口縁部分に灰釉、鉄釉が施されたものがあり、製品として扱われるものが存在する。

灰釉・鉄釉陶器の皿・鉢類は同一器種のもが重ね焼きされる場合、大小のあるものを入れ子状にして重ね焼きされる場合にヨリ土の目やトチンが使用される。

また、長石釉製品＝志野製品は重ね焼きのトチンとして常に円錐ピンが使用される。志野製品は長石釉が灰釉・鉄釉と違って溶けて流れることが少ない釉薬であり、円錐ピンの釉薬ピン先痕が上面に小さく残るのみであることからトチン使用箇所の釉薬を剝がして露胎部を作ることは行われない。

碗類は同一器種の重ね焼きが行われるということではなく、匣鉢に数個並べて入れたり、大小のものを入れ子状にして重ね焼きされ、また、天目茶碗と小皿のように異器種の重ね焼きがある。天目茶碗は大窯Ⅲ期以降では匣鉢に一個入れ焼成となり、平底の匣鉢から丸底の匣鉢使用へと変遷する。

b. 窯詰め技法

大窯の焼成室は床面が上方の煙道部へと次第に幅を減している。窯詰めは匣鉢を積み上げることによって行い、床面傾斜に水平を作るために円板状の駒爪形焼台を用いる。匣鉢積みによる窯詰めは岐阜県笠原町・妙土窯跡の調査から14列の合計222個の焼台が確認され、復元的に計測すると2856個の匣鉢積みが出来、匣鉢一個につき2個の製品が焼成されることによって5712個の製品が焼けることになる。仮に、匣鉢の積み上げの高さを天井との空間を取ることで低くしたとしても5000個の前後の製品(注48)を焼成することが出来た。さらに、匣鉢積み列の奥の煙道部寄りには裸焼きの甕や搦鉢が詰められる。

4. 瀬戸・美濃窯の近世への変容

(1) 宍窯から大窯へ

宍窯から大窯への転換問題について、宍窯終末期の窯には焼成期種の中に大窯的な焼き上がりの天目茶碗・鉄釉搦鉢・無釉平碗が存在することは以前に東洋陶磁学会で発表したことがある。

宍窯終末期の窯跡は採集されている出土陶片類から窯体構造が地下式の宍窯形態であろうと推定しているところではあるが、確認されていない。この時期の窯跡の瀬戸市水野区・水北A窯跡では鉄釉搦鉢、同水北B窯跡では鉄釉平鉢・無釉平碗、品野区・桑下窯跡では天目茶碗・鉄釉搦鉢が大窯Ⅰa期へ連続する器種として認定してよい資料である。

この現象は大窯Ⅰa期の窯跡出土陶器の中に宍窯器種が残存することと相互関係にあり、焼成品種の転換が生産者側では次第に進行していった過程としてとらえることができる。

現在までのところ、発掘調査により窯体構造のわかる大窯は瀬戸窯では小金山窯跡・昔田窯跡・王子沢窯跡・赤津B窯跡(注50)の4基、美濃窯では丸石東窯跡・定林寺東洞1号窯跡・定林寺西洞1号窯跡・妙土窯跡(注51)・隠居西窯跡(注52)・高根窯沢窯跡(注53)の6基、知多半島の先の日間賀島の下海窯跡(注54)の合計11基である。

しかし、宍窯終末期の窯跡の発掘調査は瀬戸窯においてもいまだなく、また、美濃窯では瀬戸系施釉陶器窯(注56)が未調査であり、焼成室と焼成室の間の狭間孔施設を持つ大窯との連続性を説明する資料としてはいまだ不十分である。

室町時代の窖窯として戦後まもなく発掘調査が行われて特異な窯体構造であることが明らかになった瀬戸市・小長曾窯跡は、焼成室内の中央部に横に天井から障壁を下ろし、5本の分焰柱により焼成室を二分する特殊な構造を持つ窯である。小長曾窯跡で焼成されていた施釉陶器は障壁のない窯跡の製品と何ら区別しがたい製品である。特異な窯体構造の障壁は熱効率を高めるエネルギー獲得技術の革新としてみることもできるが、それらの窯体構造は室町時代の古窯を江戸時代になって改造されたものとする異説がある。

また、焼成品種の変遷からみていくと、窖窯終末期の焼成品の中に天目茶碗・鉄釉搦鉢・無釉平碗など大窯の焼成品種につながる製品の焼成が開始されており、また大窯最古期（I a 期）の焼成品種の中に窖窯焼成品種が残存していることが知られている。

これらの不十分な調査段階ではあるが窖窯と大窯の間には連続性がわずかながら認められることから、窯体構造においても両者の間をつなぐ構造を持つ窯が存在する可能性が十分に考えられる。

窖窯から大窯への転換は現在までの調査では不明確であるが、窯体構造・焼成品種・匣鉢詰め技法など、どれをとっても当地では新しい窯業技術であり、大窯の発生は内的要因よりも外来的要因によるものと推定される。

この問題は瀬戸市内の窖窯終末期の窯跡の発掘調査が行われることによって大きく進展するものと考えている。

中世の瀬戸窯は焼成器種に中国陶磁の影響を受けており、降って大窯 I a 期の焼成品の中にも中国陶磁の器形をそのまま模したと考えられるものがある。

即ち、大窯生産形態は中国・明代の窯業の影響を受けたものと推定しているが、彼地の窯跡が不明確であり、現段階では推定の域を出ないところである。

(2) 大窯生産体制について

大窯とは瀬戸・美濃窯において15世紀末期から17世紀初頭にかけて約120年間専ら使われた半地上式の単室窯であり、瀬戸を含めて尾張地内に23基、美濃地内に約70基の窯跡が知られている。

大窯期に焼成された器種は大窯生産陶器分類として約100器種にのぼり、多種多様の製品を焼成していたことが判る。

大窯による陶器生産の展開過程は戦国期から安土桃山時代までを大窯 I a～V 期に七期編年区分でき、大窯各期の編年区分の推定実年代は次の通りである。

大窯 I a 期：1490年代から1510年頃まで、

大窯 I b 期：1510年頃から1530年頃まで、

大窯 II a 期：1530年頃から1550年頃まで、

大窯 II b 期：1550年頃から1570年頃まで、

大窯 III 期：1570年頃から1580年頃まで、

大窯 IV 期：1580年頃から1585年頃まで、

大窯 V 期：1585年頃から1605年頃まで、

大窯期の焼成品の編年的展開過程は前述した通りであるが、大窯期全体を通しての特記事項は大窯 III 期末以降 IV・V 期には瀬戸黒茶碗・志野茶碗、志野・黄瀬戸の向付・皿・鉢類の茶陶生産が興り、焼成器種として主要なものとなることである。なかでも長石釉の志野陶器は時代の代表的

な釉薬となり、茶陶以外の汎用・量産品にまで及んでいる。

瀬戸・美濃窯において近世窯業への転換時期は茶碗・水指・花生などの出現をもってする考え方が茶道史および美術史では大勢である。

また、茶会記等の文献から天正14～16年頃に瀬戸・美濃の新出の茶碗・水指・花生の使用頻度が増加することが指摘(注59)されている。このことは大窯Ⅴ期における茶陶生産と対応する状況である。

茶会記等の文献は当時の全国各地の窯業製品の使用形態が把握できるという点で特異例と言えよう。

焼成品は釉薬としての編年的展開があり、また、茶陶等の器種も同様に変遷し、両者が必ずしも一致した展開過程をたどるとは限らず、黄瀬戸のように個別の釉薬としては成立していても、三色の組み合わせによる製品の創製は後になってからという場合がある。

大窯生産の展開は15世紀末期以降の戦国期の城館跡や都市遺跡の出土資料が示しているように、需要層が武士・町衆を中心とすることが推定され、茶陶の場合は茶会記記載の如く需要に対応したものであることが知られる。大窯期全体では日常の汎用器種の天目・碗・皿類は戦国期から桃山期までを通して同時代の消費遺跡から出土しており、これらが時代を担う器種であったといえよう。その一方で特殊ともいえる茶陶生産が加わる。茶陶は中国陶磁の写しから離れて日本人の好みが強く反映された器種であり、従前の焼成品には看取できない作陶意識が反映されたものであった。

従来、これらの茶陶のみを時代の意識・技量を反映した陶器として対象としてきた茶陶・美術史がこの現象をもって近世の幕開けとしたのは当然の帰結であった。

しかし、生産基盤である大窯生産体制は戦国期の開始とほぼ同時に成立していることを考えると、連続した展開過程としてとらえるべきであって、焼成器種に茶陶生産が加わったという現象面のみで大窯期を分断して論ずることはできないと考える。

大窯生産体制は日本陶磁史上かつてなかった社会変動期に当たり、物の価値観の転換期の生産体制であったと言えよう。時代は動き、人の考え方も、好みも、下剋上から天下統一へと、動乱から安定へと変化する中で、生産器種が時代の流れと無縁で居られるはずはなく、時代とともに変化し変遷することは当たり前のことと言わねばならない。

大窯期は前代の窰窯期と次の登窯の間にあって、窰体構造・焼成器種・製作技法・窯詰め技法・匣鉢詰め技法など総合した窯業技術の集合形態であり、茶陶の生成までの長い形成期間と需要層という消費者として生産体制を維持・発展させた戦国期以降の新しい階層なくしては存在できなかった。

また、大窯期は工人の定住化による里の窯となり、立地した集落地の多くは江戸時代を通して窯業生産活動を続けられた地区である。

このことから、大窯期は窰窯期と分けて一つとして捉えられることを示している。

大窯生産の展開時期はまさに激動の戦国期から天下統一までの政治史的にも転換期であり、法制史的には近世の枠外も含んでいる。

陶磁史上では近世の転換期をどのような現象の出現をもって判断するかということであるが、従来のように茶の湯における和物茶陶の発生という考え方では特殊用途の器種の発生をもって時代の転換を論ずることになり大窯生産体制を無視したものであり、ふさわしいものとは言えない。

大窯生産体制は新しい窯業技術の集合形態であり、後の江戸時代の登窯期への移行は技術的には断絶することなく原動力となり、伝統的な大窯の窯業技術が吸収されていったことが認められ、同時に立地も同様なことが言えることから、環境と生産から販売・流通にいたる近世的窯屋としての要素を具備していたことが推測されるのである。

(3) 大窯生産形態成立の周辺

日本陶磁史の中において室町時代後期の戦国期から安土桃山時代を経て江戸時代へ移る時期は中世から近世への移行期で、窯業生産形態の転換期であり、窯業技術の上で変革のみられた時期である。

15世紀末期の日本の施釉陶器生産は尾張・瀬戸窯、東濃地域の瀬戸系施釉陶器窯^(注60)、三河・藤岡町地内の瀬戸系施釉陶器窯^(注61)の三箇所のみであった。そのうち、東濃地域と三河・藤岡町地内の施釉陶器窯は尾張・瀬戸窯からの工人移動により生産形態が伝播したものと考えることができるのである。

その本貴地・瀬戸窯は15世紀末期には瀬戸の山々から窯焚きの煙が途絶えたかのようにその数が減少し、集落近くへと移動してきた時期に当たり、ちょうど山の窯から里の窯への立地の転換期に当たっていた。

一方、美濃・三河の両地域へ伝播した施釉陶器窯は生産を継続していたとはいえ、その規模を拡大していくほどに発展していたとは考えられず、在地領主の枠内での小規模生産の継続の線を越えることができなかった。

こうした状況下において、室町幕府を支えてきた鎌倉時代以来の公家・寺院・武士階級の凋落と同時に下剋上の世となり、新たに台頭してきた戦国期の武士層が全国各地でその覇を競う乱世の時代に突入すると、それらの階級を需要層とするかのように新しい施釉陶器の出現と、それらを生み出していく新しい生産形態が出現したのである。其の新しい生産形態は当地で15世紀末から17世紀初めまで専ら用いられた大窯と呼ばれる半地上式の単室の大形窯によるものである。

前代までの窖窯に替わって大窯が新たに導入されると、窯体構造の変化と同時に焼成器種も全く新しい型式のものとなり、それに伴い焼成方法の窯詰めや匣鉢詰め技法も一新されたのである。

大窯の立地は前代の窖窯期の最末期には山中奥深いところから、集落近い里の窯へ移動しており、集落に隣接する山の傾斜面に、窯の焚口が谷に面し、山麓斜面に直交する方向で築かれ、その前方が開けた崖となる例が多く、谷から吹き上がる谷風を利用したものと考えられる。

美濃における黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部と呼ばれる茶陶を代表とする桃山陶器の発生について、瀬戸から応仁・文明の乱後に瀬戸山離散した工人が山続きの美濃の山中へ移動し、しばらく雑器生産を行っていたが、茶の湯の流行に伴い茶陶生産が開始された如くの解説が成されてきた。

そして、瀬戸山離散の時期は戦国期の混乱と荒廃により窯業活動が衰退し低迷したことが瀬戸の山々から窯の火が消えた原因であり、室町時代後期の15世紀末から16世紀中頃までの戦国期であると解釈されてきたのである。

また、現在は黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の桃山陶器は美濃窯で造られたものとして周知の事実として受け入れられているが、1980年(昭和5年)までは瀬戸窯で造られたものと信じられていたのである。

美濃において桃山陶器窯跡の発見後、前記したような瀬戸山離散と瀬戸工人の美濃への移動、

そして桃山陶器の焼成へといった解釈が生まれてきたことは想像に難くないところである。美濃の山々において相次ぐ窯跡の発見とともに、瀬戸から美濃へ移ってきたとする古窯文書の発見も、その解釈を裏付ける作用を果たしたものと見える。^(注62)

最近、戦国期から桃山期にかけての城館跡や京都・堺などの都市遺跡の調査が飛躍的に進展し、夥しい陶磁資料の出土が知られてきている。同期の消費遺跡における陶磁器の消費量は全国的に集計すれば膨大な量となり、国産の施釉陶器・無釉陶器と輸入陶磁器で賄われていた。

その中で戦国期の施釉陶器は国産品の全てが瀬戸・美濃の両窯で焼成されたものであることが両区域の窯跡の発掘調査によって確認することができている。

15世紀末期には瀬戸の窖窯による生産は山中から里の窯へと立地の転換期を迎えており、それまでの山中における生産活動に終止符が打たれたことは事実であり、大きな業界の再編期に差し掛かっていたことが推定されるわけである。

このような窯の立地に認められる再編の動きは生産業界その中にその原因を求めるのではなく、戦国大名の台頭といった下剋上の世の中となって社会組織の変革期に当たり、生産から流通、そして消費といった流通経路の変化と消費の需要層が大きく変わろうとした時代の所産である。日常生活容器としての陶磁器の需要は高まり、中国陶磁を中心とする輸入陶磁器の流通は進行し、窖窯生産による器種にあきたらなくなった新しい消費者が新しい陶磁器を求めていたことは容易に推定できることである。

15世紀後半以降、瀬戸の山々から窯の数が減少していく現象と新しい陶磁器を求める気運とが相関関係にあり、新しい施釉陶器の生産はそうした社会の新しい好みを追い風として出現したものである。

そのことは戦国期における瀬戸・美濃両窯の新しい施釉陶器生産が出現と同時に飛躍的に生産量を確保し、その製品が全国的に遠隔地まで流通する事実と符合するものである。^(注63)

15世紀末期、新しい施釉陶器の生産は大窯生産形態を導入することによって達成された。その大窯は従前の窖窯と比較しても一回の焼成量が倍増したことが推定され、瀬戸・美濃両窯において同時期における窯数は窖窯期の時よりも少ないが、生産量から比べれば生産量は減少していないことが推定される。

大窯における施釉陶器の生産は大甕や擂鉢などの大形のもののが裸焼きされることを除けば、天目茶碗や丸皿など全ての施釉陶器が匣鉢に入れられて窯の中に床から重ね積みされて焼成されており、焼成にかかる労働力は倍加しており、成形はもちろんのこと施釉・匣鉢詰め・窯詰めなどの各作業量は窖窯期のものを遙かに凌ぐものであったことが推定できる。

そのため大窯生産形態の導入とともに窯屋の集約化が進行したものと考えられ、業界再編の変革期であった。大窯は現在までの調査によれば尾張・瀬戸窯に最初に導入されている。

15世紀末から17世紀初めまでの大窯による焼成品の編年は五段階七期に分けて考えているところであり、その最古期の大窯Ⅰa期に属する窯跡が瀬戸市水北町地内に存在している。その後、尾張瀬戸窯における大窯による生産は大窯Ⅲ期まで継続し、室町時代後期の戦国期の施釉陶器生産地として栄えたのである。

また、美濃窯は大窯Ⅰa期の窯跡が多治見市小名田町地内に存在し、瀬戸にわずかに遅れることで出現をみたことが焼成器種と型式編年により推定できるところである。その後、美濃窯は大

窯生産が絶えることなく継続し、桃山期の茶陶を生み出し、江戸時代から現代に至るまで地場産業として確立した生産活動を行っている。

こうした近年の大窯の発掘調査を伴いながらの15～16世紀の陶器生産の研究から、瀬戸山離散の解説で常に登場した戦国期の戦乱による荒廃により窯業生産活動が衰退してしまい、瀬戸窯はもちろん美濃窯も雑器生産窯として細々と生産を継続していたとする解釈は全く調査不十分の時代の憶測にすぎなかったことが確かめられたわけである。

15世紀末から17世紀初めまでの戦国期から桃山期は窯業生産活動の高揚期で、また、技術革新期で、窯屋の集約化による業界再編の時期であり、江戸時代へ継続しうる生産基盤が生み出されてきた時期である。

その意味で戦国期から桃山期を通じ生産基盤となった大窯生産形態を江戸時代に先立つ近世初期窯業形態として位置付けてよいものと考えている。
(注64)

5. 戦国期から桃山期の瀬戸物生産

(1) 瀬戸大窯の展開

戦国期から桃山期の瀬戸大窯は17基が確認されているにすぎないが、その展開過程は変化に富むものである。

瀬戸大窯は美濃窯に先駆けて15世紀末期に水野・品野・瀬戸の三区に発生をみたが、大窯Ⅰb期から大窯Ⅱa期には瀬戸区のみが生産を続け、大窯Ⅱb期に入ると瀬戸区を除いて外延の水野・品野・赤津の三区へ生産が移り、大窯Ⅲ期には品野区の月山窯跡のみとなり、以後、活動を停止してしまうことになる。
(注65)

大窯Ⅱb期に窯数が増加することは美濃窯の場合も同様である。その大窯Ⅱb期は推定実年代が16世紀中頃から後半代に入った時期で戦国期の終末期に当たり、戦国大名間の戦争も多く物資の消耗期と考えられ、生産者側では特需期であったと推定される。

大窯Ⅲ期の時期（推定実年代1570年頃～1580年頃）になると天下統一が成り、戦争特需が少なくなり、社会の復興期となって新しい生活の中での器物を欲求する転換期に入る。

窯屋は経営を模索するなかで生産の継続が困難となり、廃業や新転地への移動へと追い込まれていったものと推定される。

(2) 大窯の展開と瀬戸山離散

瀬戸窯の衰退現象が出現する大窯Ⅲ期の時期に合わせるかのように、天正2年（1574年）銘の織田信長の朱印状が存在する。
(注66)

この朱印状は真偽の問題があるにせよ、次のように記されている。

瀬戸焼物釜

事如先規彼

於在所可焼之

爲他所一切釜

不可相立者也

天正貳 正月十一日 信長（朱印）

賀藤市左衛門へ

この朱印状は瀬戸窯を保護するため尾張国内の他の窯を禁じた禁窯令とすることを通例としてきたが、文面から読み取れることは禁窯令として解釈することは出来ない。

朱印状は「瀬戸焼物（施釉陶器）の釜（窯）は先に定められているように尾張瀬戸の地で焼くこと。他の（尾張瀬戸以外の）場所においては窯を焼いては（施釉陶器を焼いては）いけない」と解釈することができる。

このことは原文次郎氏が「瀬戸物は一切瀬戸の村内で焼け。村外へ出て焼くことは罷り成らぬという厳重な制限であって、保護らしいところは少しもない。瀬戸の陶家に取っては不便・不自由・不利益こそあれ、一向有難からぬ迷惑千万のものとししか見えぬ」と早くから指摘していることである。^(注67)

信長の朱印状は天正2年の頃、瀬戸窯の工人が尾張瀬戸を捨てて隣接する美濃へ移動するいわゆる瀬戸山離散の現象が激しくなり、信長の力を持って瀬戸工人の移住を抑えて瀬戸窯の再興を計ろうとした尾張・瀬戸窯の内部へ向けて発せられた制約であったのである。

このことについては尾張国内の常滑窯の研究からも常滑窯が同朱印状による制約がなかったとする禁窯令説の反論があり、朱印状の瀬戸窯制約説を肯定している。^(注68)

瀬戸窯における「瀬戸山離散」とはいったいどういう現象を指し、その時期を何時にするかという問題が改めて問われることになったのである。

尾張・瀬戸窯における窯業生産活動は古くは10世紀の瓷器窯からであり、以後、当地は陶都として各時代の陶磁器生産の主要地として栄えてきたのであるが、戦国期から桃山期の大窯期の中で、日本陶磁史を代表する桃山期の茶陶生産が行われていないという事実が存在する。

その時期は大窯Ⅳ・Ⅴ期に編年する時期である。即ち、現在までの調査では瀬戸における大窯は21基が確認されているが、桃山茶陶の黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の陶器群を焼成した窯が尾張・瀬戸地内からは発見されていないのである。

この大窯Ⅳ・Ⅴ期は推定実年代では1580年頃～1605年頃までを考えているところである。

「瀬戸山離散」とは瀬戸の山から陶工が離れて何処かへ移動するか、窯業活動を廃絶してしまうかの現象という解釈をすると、陶工が瀬戸の山から離れることにより窯業生産活動は衰退し、途絶しないでも生産量が減少し、産業として成り立たない状況下におかれる結果となることである。

瀬戸の陶工の移動先は大窯Ⅳ・Ⅴ期の窯跡が存在し、桃山茶陶の黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の陶器群が焼成されている美濃の山が容易に考えられるところであり、美濃以外の大窯生産の成立地の発生にも関係しているもの推定される。

この朱印状にある天正2年（1574年）は大窯Ⅲ期に当たり、瀬戸の窯業生産活動が衰退し、わずかな活動しか存在しなくなった時期である。まさに、瀬戸窯生産が中断しようとする、瀬戸山離散の頂点に達しようとする時期にあった。「瀬戸山離散」はこの大窯Ⅲ期以降の衰退現象を指すものと考えられる。^(注69)

瀬戸窯は大窯Ⅳ・Ⅴ期の桃山期において茶陶生産を行うことができなかったが、その要因は鎌倉時代以来の長年の施釉陶器生産による瀬戸の山々が荒廃したことによるのか、桃山茶陶の製作に必要な粘土や釉薬原料の鉄・長石・銅などの入手が美濃の方が勝っていたためか、また、最大の需要者である都市生活者の武士・公家・町衆等からの受注が取れなかったのか、今後に残され

た課題は多い。

朱印状は瀬戸から離散する陶工と瀬戸の地に留まる陶工の二派に分かれた状況下において、これ以上の離散陶工を阻止し、陶都瀬戸を再興すべく領主信長へ保護を願い出て与えられた政令であり、瀬戸の陶工へ向けての制約であったと解釈した方が瀬戸窯の調査結果に符合する。

天正10年(1582年)に信長が本能寺の変で倒れた後、信長の朱印状が効力を持ち続けていたとすれば、瀬戸焼物(施釉陶器)窯は瀬戸のみに立地を免許されて焼くことが出来たのであり、茶会記に記載されている茶入・茶碗に美濃ではなく瀬戸の名を冠して産地名を記していることを考え合わせると、桃山期の茶陶が美濃で焼成されているものであっても瀬戸物として流通させる必然性が存在しているわけである。同時に、両地域が隣接して原料陶土や釉薬材料が類似していることもあり、製品の上でも類似品となり、両者を混合させて流通させても何ら問題が生じなかったことがその流通を継続させる結果となったものと考えられる。在来の美濃で焼いている陶工にとっては歴史ある瀬戸物として得ることができ、名を捨てて実を取ったことになった。

また、移住の瀬戸陶工にとっては瀬戸陶工としての気概が瀬戸物として流通させたものと解釈できる。美濃で活動した陶工は尾張瀬戸の陶工であるとする系図を携え、製作した陶器を全て瀬戸物として扱った。結果として、美濃で生産された陶器群は美濃物として茶会記に明記されることがなかった。

それらのことは別の見方からすれば、瀬戸物を生産する地域が尾張瀬戸から隣接する美濃地域を含めた拡大地域になったことを意味している。

天正2年の信長の朱印状は美濃・久尻へ移って開窯した加藤市左衛門(与三兵衛)景光が持参したといわれ、現在、多治見市蔵となっているものである。

尾張瀬戸の陶工は信長亡き後のためなのか、瀬戸山離散から瀬戸を再興すべく瀬戸の陶工に向けて出された瀬戸以外では焼いてはならぬという朱印状を持って美濃入りし、自ら瀬戸の陶工であることを系図に示して身分を明らかにしながら、瀬戸物を美濃の地で焼いていたことになるわけである。当時の瀬戸物は本音と建前を使い分けた陶工の所産であると言えよう。

歴史的に見れば、美濃窯は大窯Ⅲ期以降江戸時代末期(天保初期)まで瀬戸物の産地として瀬戸焼の名の下で生産活動が展開し、その間に美濃窯の名が歴史の表に出てくることがなかったのである。

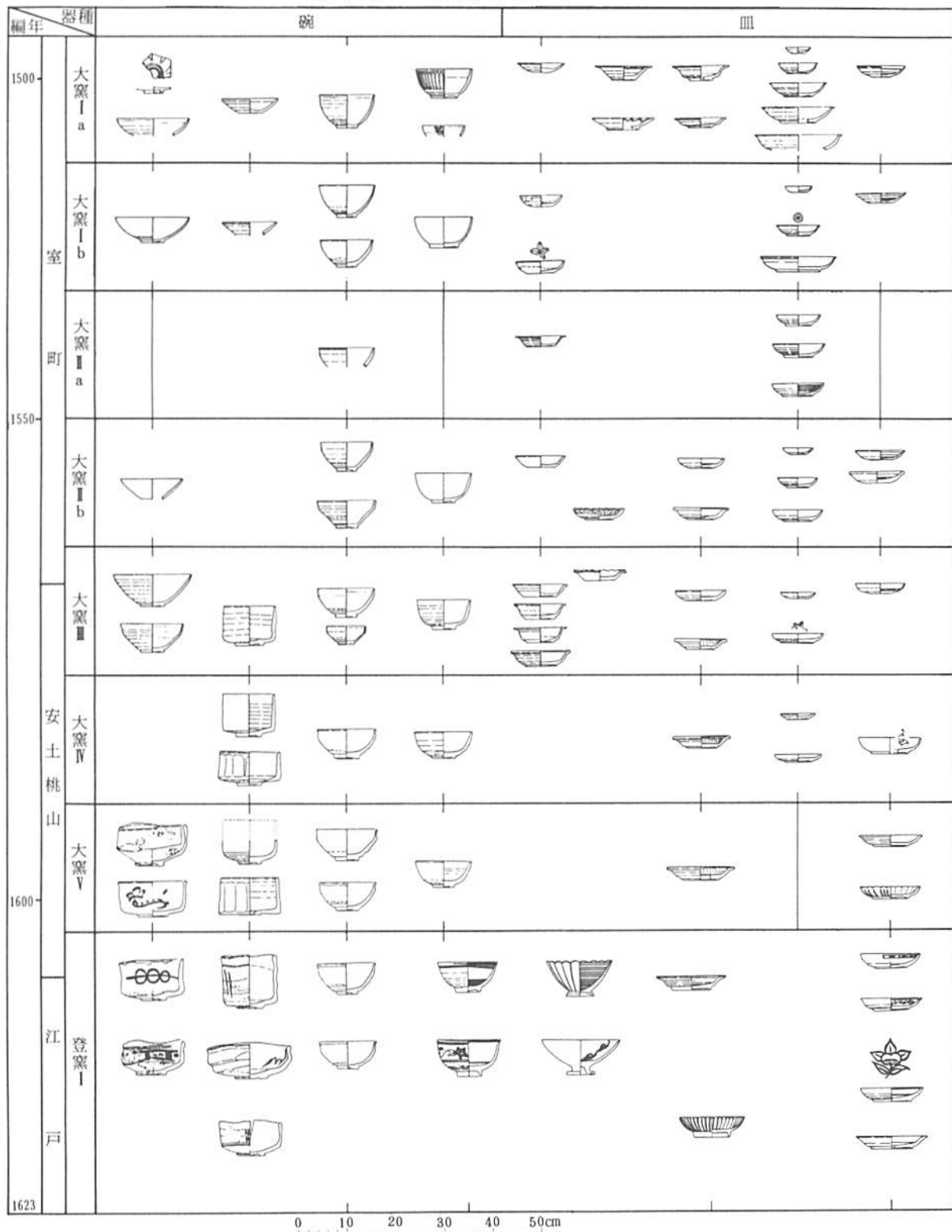
(注)

- (1) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ) 瀬戸市歴史民俗資料館 1986。
- (2) 杉崎章也「尾張国日間賀島下海古窯址の調査—古瀬戸窯終末期の窯構造変遷—」(『瀬戸市の古窯』2) 瀬戸市教育委員会 1969。
- (3) 中根教明『研究紀要藤岡古窯跡』1986、藤岡町文化財保護委員会『藤岡の古窯』藤岡町教育委員会 1985。
- (4) 杉崎章也「尾張国日間賀島下海古窯址の調査—古瀬戸窯終末期の窯構造変遷—」(『瀬戸市の古窯』2) (前掲書)。
- (5) 杉崎章・宮石宗弘「瀬戸市昔田古窯址群の調査」(『日本考古学協会第35回総会研究発表要旨』) 日本考古学協会 1969。
- (6) 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ) (前掲書)。

- (7) 美濃古窯研究会『美濃の古陶』光琳社出版 1976。
- (8) 美濃古窯研究会『美濃の古陶』（前掲書）。
- (9) 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）東洋陶磁学会 1988。
- 00 牟田ヶ洞窯跡の発見の日は本人自身に混乱があり、文献によって違っている。即ち、文献の年代順に追っていくと4月18日（荒川豊蔵「美濃古窯発掘の思い出」（『星岡』70）星岡窯研究所 1936、）4月11日（当時古窯跡を案内した加藤肇（当時中学2年）の日記、加納陽治『美濃の陶片』徳間書店 1973）、志野筍絵陶片の箱書（自著）、4月12日（荒川豊蔵『緑に随う』日本経済新聞社 1977）と三説あったが、当時の日記の発見から4月11日に確定した。
- 01 古窯跡の名称は後世学術的に名付けたものが多く、所在地の小字名を当てる場合や地区名別に通番号とすることが行われている。牟田ヶ洞は地籍の字名であり、土地の人が「むたがほら」と呼称し（荒川豊蔵『緑に随う』（前掲書）1977、加藤唐九郎『黄瀬戸』寶雲社 1933）「むたほら」とは言わなかった。現在、現代仮名使いによって牟田洞と表記して「むたほら」と呼称することが一般化している。本来なら「牟田洞」と表記しても「むたがほら」と呼称すべきであろう。本稿は「牟田ヶ洞」または「牟田洞」のどちらの表記をしても「むたがほら」と訓み、窯跡名として使用する。
- 02 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 03 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 04 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 05 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）（前掲書）。
- 06 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 07 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 08 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）（前掲書）、杉村啓治「小名田美濃大窯」（『多治見の古窯』）多治見市教育委員会 1976。
- 09 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 20 1985年（昭和60年）に物原のみの確認調査が行われたが未報告である。
- 21 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 22 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 23 榎崎彰一・井上喜久男『妙土窯跡発掘調査報告』（前掲書）。
- 24 大江余他『土岐市中央自動車道関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』土岐市教育委員会 1971。
- 25 田口昭二・若尾正成『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』多治見市教育委員会 1987。
- 26 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 27 田口昭二・若尾正成『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』（前掲書）。
- 28 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）（前掲書）。
- 29 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 30 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）（前掲書）。
- 31 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（『東洋陶磁』15・16）（前掲書）。
- 32 拙稿「美濃窯の研究(1) -15~16世紀の陶器生産-」（前掲書）以来、大窯Ⅴ期の終末を1610年頃と推定してきたが変更する。
- 33 竹内順一「荒川豊蔵と美濃焼」（『荒川豊蔵展図録』）中日新聞社 1988。
- 34 榎崎彰一・井上喜久男『妙土窯跡発掘調査報告』笠原町教育委員会 1976。
- 35 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 36 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 37 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。
- 38 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ）（前掲書）。

- 39 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ) (前掲書)。
- 40 植崎彰一・井上喜久男『妙土窯跡発掘調査報告』(前掲書)。
- 41 田口昭二・若尾正成『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』(前掲書)。
- 42 田口昭二・若尾正成『尼ヶ根古窯跡群発掘調査報告書』(前掲書)。
- 43 大江余他『土岐市中央自動車道関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』(前掲書)。
- 44 大江余他『土岐市中央自動車道関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』(前掲書)。
- 45 植崎彰一他『高根古窯跡群発掘調査概報』土岐市教育委員会 1984。
- 46 若尾正成『東町1・2号窯発掘調査報告書』多治見市建設部・多治見市教育委員会 1987。
- 47 今井静夫「中世の施釉陶器」(『美濃の古陶』)光琳社出版 1976。
- 48 関口広次「美濃・妙土大窯の復元とその構造について」(『物質文化』33) 1979。
- 49 拙稿「瀬戸美濃大窯の成立と伝播」(『東洋陶磁学会第13回大会研究発表要旨』)東洋陶磁学会 1985。
- 50 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ) (前掲書)。
- 51 藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」(『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ) (前掲書)。
- 52 植崎彰一・井上喜久男『妙土窯跡発掘調査報告』(前掲書)。
- 53 田口昭二他『隠居西窯跡発掘調査報告書』土岐市教育委員会 1988。
- 54 植崎彰一他『高根古窯跡群発掘調査概報』(前掲書)。
- 55 杉崎章他「尾張国日間賀島下海古窯址の調査—古瀬戸窯終末期の窯構造変遷—」(『瀬戸市の古窯』2) (前掲書)。
- 56 中世瀬戸窯の生産技術及び影響化によって発生した窯業形態。
- 57 滝本知二「藤四郎と茶入」(『陶器講座』1)雄山閣 1972。
- 58 拙稿「近世城館跡の陶磁ノート(5)」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』8)愛知県陶磁資料館 1989。
- 59 赤沼多佳「伝世美濃陶の編年」(『東洋陶磁学会第12回大会研究発表要旨』)東洋陶磁学会 1984、同「茶陶よりみた展開」(『第7回日本貿易陶磁研究会』)於青山学院大学 1986。
- 60 小山富士夫「美濃の古窯址」(『世界陶磁全集』3)河出書房 1956。
- 61 中根教明「研究紀要藤岡古窯跡」、藤岡町文化財保護委員会『藤岡の古窯』(前掲書)。
- 62 加藤唐九郎「美濃古窯文書」(『陶磁』8-2)東洋陶磁研究所 1936。
- 63 拙稿「近世城館跡の陶磁ノート(1)」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』4)愛知県陶磁資料館 1985。
- 64 拙稿「瀬戸・美濃窯の近世への変容について」(『貿易陶磁研究』7)日貿易陶磁研究会 1987。
- 65 拙稿「戦国・桃山期の瀬戸陶器」(『美濃の古陶』3)美濃古窯研究会 1989。
- 66 加藤唐九郎「美濃古窯文書」(『陶磁』8-2)(前掲書)、竹内順一「美濃古窯文書」(『美濃の古陶』)光琳社出版 1976。
- 67 原文次郎「瀬戸陶家に与えたる織田信長の黒印朱印のいきさつ」(『陶磁』3-5)東洋陶磁研究所 1931。
- 68 赤羽一郎『常滑 陶芸の歴史と技法』技報堂出版 1983。
- 69 拙稿「近世城館跡の陶磁ノート(4)」(『愛知県陶磁資料館研究紀要』7)愛知県陶磁資料館 1988。

近世瀬戸物編年図表(1)



0 10 20 30 40 50cm

向付	花瓶・香炉・水注・茶入	瓶・向付・水指・花生	搨鉢
	